

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

日本学2005 『公開研究会』 : 中国は日本の「技術の文化」から何を学ぶか

著者	足立原 貫, 清成 忠男, 高 増杰
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	3
ページ	45-76
発行年	2005-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00022576

日本学2005『公開研究会』

—中国は日本の「技術の文化」から何を学ぶか—

足立原 貫
清成 忠男
高 増杰

司会 日本学2005『公開研究会』第1回目を始めさせていただきます。

本日の研究対話の先生方をご紹介します。

皆様の方から向かっていちばん右は高増杰先生です。中国社会科学院日本研究所副所長、同教授、法政大学客員教授でいらっしゃいます。(拍手)

1944年、北京市生まれ。北京大学研究生院日本語文学研究科修士課程修了。国際基督教大学博士課程修了、博士号取得。中国鉄道学院講師、中国社会科学院日本研究所研究員・研究室長を経て、1992年から同教授、1997年から同副所長。比較文化専攻。著書は、『日本近代成功の示唆』『日本の社会発達と政策選択』『東アジアにおける文化の接触』等、たくさんございます。

そのお隣は清成忠男・法政大学総長です。(拍手)

1933年に生まれ、東京大学経済学部卒業。法政大学経営学部助教授、教授、学部長を経て、1996年から同大学総長。産業論、地域経済論を専攻。中小企業研究の専門家で、1997年、日本ベンチャー学会を設立し、初代会長に就任。その他、中央酒類審議会会長、中小企業分野等調整審議会会長、経済審議会、国土審議会、産業構造審議会などの委員を歴任。著書は『グローバル時代の地域づくり』『日本型産業の未来像』『企業家とは何か』等、たくさんございます。

そしていちばん左側は、足立原貫・日本学研究会代表・中国湖南省・武陵大学客座教授です。(拍手)

1930年生まれ、東京大学農学部卒業。1996年、富山県立大学短期大学部教授、同学部長を定年退職。1967年に廃村を拠点として開始した「農業開発技術者協会」運動を軸に、「人と土の大学」「草刈り十字軍」「中国への技術協力」など幅広い実践活動を展開。1973年に山崎賞を創設。1987年に日本学研究会を発足させました。著書は『一つの社会の死から』『道標はない』『山へ入って草を刈ろう』『へんじゃないかへんじゃないか—世紀がかわるから』等、たくさんござ

います。

それでは、日本学研究会代表・足立原先生から開催趣旨説明を含め、口火を切っていただきます。

よろしくお願いいたします。

足立原 きょうのこの会のねらいを先にお話し申し上げます。よくあるシンポジウムやフォーラムというかたちを採らずに、あえて「公開研究会」としたことからお話しします。

高先生との長年のお付き合いのなかで、いろいろ話し合っているといつでも最後に出てくるのは、「フォーラムやシンポジウム、あれはもの足りませんね」ということです。労多くして実り少ない。時間が限られていて、コーディネーターが、あるところへなんとか持っていこうというような格好で、たいがい時間切れということで切られてしまうし、みんな欲求不満で終わってしまう。

大事なことは対話の姿勢です。たとえば高先生と私が、お互いに研究していること、関心を持っていることについて、研究室で資料を検討し合うような様子を、皆さんに見て、聞いていただく。そういった機会をつくりたいと前から思っていました。きょうはそういう試みの第1回でもあるわけです。

ところが、二人きりでやっていると、話が迷路に迷い込んで出口が見つからなくなったときに、冷静に見てくださる方が一人いないといけな。きょう、その役を清成先生にお願いしてあります。

この会場は、私が日本学研究会を始めたときに「日本学研究草の根シンポジウム」の第1回目と第2回目を開催したところです。清成先生にはそのときからずっとご協力いただいています。

きょうは3人なのに鼎談とはしませんでした。3人いるけれども、1対1、2人の対話が核になるからです。相手が言う、こちらが言う、そして聞き出す。

私の書いたものが皆さんの手元に届いていると思います。昨年10月4日に外務省と中国大使館の後援を得て、法政大学が主催した法政大学国際日本学シンポジウム『日中の文化関係を考える－相互認識の「ずれ」を中心に－』に、中国側から7人、日本側から6人出て、私はそのときの1人ですが、その報告書のために書いた発言要旨です。

われわれ日本人は日本の姿、自分自身が、なかなか分からない。分かったつもりで分からない。他人がどう見ているかというような目がどうしても必要になるときがある。これは個人の場合でも団体の場合でも同じだと思います。国家間となつたらもっと重要だと思います。

日本を研究している外国の専門家はたくさんいらっしゃいます。世界中にいらっしゃいます。そういった人たちが日本をどうとらえているのか、日本の何に関心を持って、どういう方法で、どういうふうに見ているかという、その中身を研究しよう。だから、日本を研究している外国人の日本学ないしは日本研究、それを研究しよう。しかし「日本研究研究」では語呂が悪いので「日本学研究」としました。

世界中にたくさんの日本研究者・日本学者がいるなかで、私は対象を中国に絞りました。古代から日本の情報を集めて記録に残してきたのは中国です。日本の異文化との接触という、すぐに16世紀の鉄砲伝来やキリスト教伝来あたりから始まってしまうのですが、そうではなくて、千数百年前からあった中国の人たちの日本観や日本研究をまず研究しなければいけない。その点で清成先生と意見が一致しました。

英語圏の日本研究はたくさんあるわけですが、法政大学では、非英語圏の日本研究を中心に研究所を設立しました。お互いに連絡を取り合い、協力しあって、いろいろなことをやっけていこうと思います。さてそこで、日本を研究している世界中の学者のなかで、私は高先生に目をつけました。目をつけたと言葉は悪いですが。

私は、1979年から農林技術協力で中国へ通っています。その間に、自分が長年思っていたことを向こうの人たちにおつけていろいろ反応を見てきました。少なからぬ中国の日本研究者・日本学者とも知り合いました。高先生の書かれた論文の一覧表の一部をここに持っていますけれども、1990年、中国に『日本問題』という研究書がありました。1991年から『日本学刊』と名前が変わっています。それに高先生が「日本学と日本文化研究」という論文を書いておられ、日本学の研究の方法論の検討から入っておられます。私が「この人に食いついてみよう」と思ったのは、方法論から地道に入っていくということからです。

日本とは何かを研究するために、方法論をきちんと押さえるところから進め

られた。『菊と刀』のルース・ベネディクト、日本研究者で大使としても来られたエドウィン・ライシャワー、それから『ジャパン アズ ナンバーワン』を書いて知られたエズラ・ヴォーゲル、こういった人たちを取り上げ、文化人類学者のルース・ベネディクト、歴史学者のエドウィン・ライシャワー、社会学者のエズラ・ヴォーゲル、それぞれ視点の違いによって、アプローチの仕方も内容も異なる。そのへんを高先生は克明に比較しておられる。

高先生のその論文は非常に私好みなのです。肩をいからせるのではなく、控えめに、今後の中国における日本研究の一つの参考までに、こういうものを提供するというような書き方。私はそれを読みまして、この先生の日本研究の内容をずっと追っていきたくて思いました。

『日本学刊』に収められた高先生の論文は文化問題・社会問題ですが、日本の幕末に関する研究が15編あります。福沢諭吉がよく出てきます。私は、高先生は福沢諭吉の研究者だと思ったほどです。近代中国の思想家・嚴復と福沢諭吉における近代思想の比較とか、ヨーロッパの文明をがっちり受け止め、それと格闘してきたアジアの姿を洗い出していく。高先生は特に幕末の研究をかなりやっておられる。私はそういう高先生に興味を持ち、お付き合いを深めてきました。

日本を研究している外国人のその研究の中身を研究しようというときに、この人という人を徹底的に洗ってみたいと思い、きょうは、高先生の研究をモデルにして、中国の日本研究者は日本をどう見ているのか、日本の何を見ているのかを考えてみようと思います。

高先生が幕末の問題を話されると、福沢諭吉が盛んに出てきます。そこで「高先生は、日本の近代思想の源流として福沢諭吉にいちばん注目しているのですか」と尋ねたら、「いや、そうではない。佐久間象山だよ」とおっしゃる。なぜ佐久間象山かということになりましたら、技術の問題、ヨーロッパを源流とする科学技術を日本側はどう受け止めたかというあたりのことが出てきました。これは高先生の引き出しからもっといっぱい取り出さなければいけないと思ったのです。

きょうは清成先生と、高先生の引き出しをたくさん開けようと思っています。

口火を切ると言いながら、口火がたいへん長くなってしまい、導火線もだい

ぶ燃えてしまいました。このへんで本題に入りたいと思います。

高先生にまず伺いたいのは、なぜ高先生は日本研究を始めたのか、なぜ日本語を勉強し、日本研究を始めたのか。その結果、今、日本をどのように見ておられるか。きょうのテーマを技術の問題にしたのですが、技術の問題に高い見識をお持ちの高先生の自己紹介をも含めて、そのへんのことから入っていただきたいと思います。

高 今、ご紹介にあずかりました高増杰です。

きょうはもともと、日本という研究対象をもうちょっと細かく見るというような意味で研究会をやろうという話になっておりました。最初の考え方としては、足立原先生からお話をいただきましたけれども、考え方を整理していくプロセスが必要になってくるのではないかということで、こぢんまりとやっていくというようなことでした。その後、総長からいろいろアドバイスがあり、このようなかたちになっております。

要するに、日本研究をやっている人たちがどういうことを考えているのかというのが、一つの研究テーマとして考えられる。今、足立原先生からそういうお話がありましたが、考えてみますと、私は俎上の魚になってしまい、これから解剖されるというようなことになります。高増杰とはいったいどういう者か。その解剖はそこから始まるのではないかと思います。

私はここ2年間ぐらい、法政大学で客員教授というかたちで勉強をしながら研究作業もさせていただいているところです。本当に、すっかりお世話になっておまして、どうもありがとうございます(笑)。

富山へ来る飛行機のなかで総長に話したのですが、私はそろそろ還暦になります。最初は日本語、それから日本の文化、思想、そういうかたちでたどってまいりました。私が高校生のときですけれども、いろいろ小説を読んでいました。若いときは文学青年で、バルザックも読みましたし、ドストエフスキー、ゴーリキー、ユーゴー、いろいろなものを乱読というかたちで読みました。あの時代、若い人たちは相当率直に考え、本をあさって自分なりに考える、そういう時代でしたが、そのなかで私がいちばん感動したのは、日本の小説だったのです。

一つは、30年代、40年代に翻訳が出来ていましたが、『万葉集』。中国語版が

もう出来ていました。それから『源氏物語』。いろいろ乱読しているわけですが、たとえばフランスの文学やらイギリスの文学やら読んでおまして、当時の社会状況だとかいろいろ分かる。ロシアあるいはその後のソ連の文学も少しは読んでみましたが、そのなかにはイデオロギーが結構入っている。日本の小説、特に『源氏物語』に感動したのは、繊細というのか、非常に神経が使われており、たとえば主人公としての光源氏、恋文を書いたりしておまして、本当に繊細な精神の持ち主だということで感動させられました。

私は小さいときから内気で、いろいろな物事を考えること、いろいろな本を読むことにふけておりました。たぶん内気ということもあるだろうと思いますが、非常に感動させられたということで、日本に対する興味が沸き上がってきたというのが一つです。

それからもう一つは、今から考えてみると、当時の中国政府が日本との関係を強化するためにいろいろな措置をとったことが分かりますが、あのときはまだ若いですから、たとえば中国で日本の工業展覧会と言われているもの、日本流に言いますと、日本の商品の見本市みたいなものが開かれる。そういうところにも、興味を持っているわけですから行きました。行ってみまして、そのときの私の第一の感想は、非常に繊細な感覚の持ち主の人たちがつくった製品だなということです。カメラにしても、その他の製品にしても、よく出来ておりました。たいへんきれいに出来ており、性能もよくて、こぢんまりしているということで、感動させられました。

実は中国では、昭和30年代初めごろから、日本を勉強する人たちの育成に力を入れていました。大学にしても研究機関にしても、どんどんつくって行って、募集する人たちの数もどんどん拡大していく。私はあとからそれを研究したわけですからよく分かりましたが、当時はよく分かりませんでした。けれども、その時流に乗って、私もこういうことをひとつ勉強しようかなと思って受け、運良く受かった。これがそもそもの出発です。

今から考えてみて、よかったなというところは、最初の出発は今言ったように、日本人は繊細な感情の持ち主ということで感動したということです。その後、一つ大きな峠を越えたのは、中国文化と日本文化との相違についての確認です。たしか60年代中ごろだったと思いますが、中国文化と日本文化の交流が

よく議論されていましたが、たとえば中国の文化、日本の文化、あるいは遣唐使の話、こういう話が授業のなかにも出ますし、メディアでも出てくるわけです。けれども、最初の出発は「繊細だ」ということで、私自身としては日本文化がちょっと違う存在だという発想でした。ですから、遣唐使であるとか、文化交流があって日本と中国はよく付き合ってきたということは分かりますけれども、文化の性格について言えば、ひとつ違和感がありました。

若くてよく分からなかったのですが、中国の文化と日本の文化は、私の見たところ、どうも違う。それは異なっている。よく言われているけれども、古代中国の文化が日本列島に渡って、日本でそのまま広がったというような話なのですが、それはどうも違うのではないか。簡単に言いますと、学部ときはそこからひとつ違和感を覚えていましたので、では、徹底的にそれを考えなければいけないということで、日本研究という道に入ったわけです。

その後、70年代に入って、その前にはプロ文革（プロレタリア文化大革命）があって研究など全然できず、ブランクがあったのですが、回復して改革开放という方針が取られ日本に来たのです。これで生の日本と肌で接触し、なるほど、違うのだという私の考え方は正しかったと自分で確認しました。その後はもう取捨がつかなくなった。いろいろな比較をやりながら、自分のなかで葛藤しながら、日本について勉強してまいりました。

こういうようなかたちでやってまいりまして、最初は中国の文化と日本の文化が違うのだという考え方から出発したわけですから、その後の研究作業は、主として異文化の研究という視野で日本文化を見る。同時に、中国の文化についても考えさせられる。一種の反省とも言えるだろうと思いますけれども、そのようなかたちでずっと勉強してまいりました。

総長のところで、今、国際日本学ということで私も勉強させていただいていますが、語弊があるかもしれませんが、異文化研究という立場で考えると、勉強することが一杯あると思います。今のところそういうような視野でいろいろな資料を分析したりして、整理をしております。

実はきょうは技術がテーマですが、たぶんあとで総長からも技術の話が出るだろうと思いますけれども、中国の文化と日本の文化、全然同文同種ではありません。まるっきり違う。遡って考えてみると、だいたい中世のところからだ

いぶ分かれてしまった。これまでの研究あるいは勉強の積み重ねで、私自身、それを自覚したと言いますか、明らかにしたと言いますか、そのようなかたちで確認してきたとも言えるだろうと思います。

そんなところで、今、生かじりに日本研究をやっているし、昔の友人と話をするときには、「あなたがやっていることはわれわれがやっていることとどうも違う。一味違うところもあるのだ」とも言われていますが、それを確認して、やっぱりよかったなと思うところがずいぶんあります。

足立原 自己紹介的な部分はこのへんまでにして、いよいよ対話に入りたいと思います。

中国と日本は違うのだと今おっしゃいました。その違いがどのへんからはっきりしてきたのか。今、中世とおっしゃった。日本の古代史は中国の文書がなかったら分かりません。日本には文字もなかったし。また、中国は紀元前から、幻の王国、夏・殷のあたりから、日本から見ると、かなり先進的な動きをしています。私は先進国という言い方は嫌いなのですが、今様の言葉で言えば、中国は長い期間、日本にとって先進国だった。「日本」という国名もなかったし、国のかたちもなかった。そんなとき、中国からかなりたくさんものを日本は受け入れ、学んできています。

きょうの焦点になっている技術の問題、その根底にある科学の問題にしても、中国の科学史なり技術史なりを追っていくと、びっくりすることがたくさんあります。すべて欧米中心の近代文明のような発想から、逆に反省させられることがあるわけです。インド、エジプト、メソポタミアなど他の文明圏に比して、中国の文明は独自にいろいろなものを形成してきたとみられますが、その中国から日本はたくさんものを学んできた。遣隋使や遣唐使が多くのことを学んできていろいろなものが入ってきたけれども、それが中世以降、分かれてきた。今、先生がおっしゃったように、日本と中国は違うのだと言い切れるように分かれてきたのは、分かれさせてきたのは、何なのでしょう。そのへんからきょうの本題に入っていきたいのです。何が分かれさせてきたか。「技術の文化」という視点から解明してみたいと思います。

高 中世に分かれたということについては、これまでもずっと議論してまいりました。たとえば遣唐使の時代には中国からいろいろなものが日本列島に入

ってきたというのは、たしかに歴史的な事実です。けれども、当時にしても、日本の社会の実情に合わせてそれを日本化した、あるいは改造した、あるいはやり直しをした、修正をしたということが、ずいぶんあったのではないだろうかと思うのです。

最近、NHKで「大化の改新」というドラマをやりました。あれを見てみると、唐の時代のやり方、あるいは唐の時代の国家体制、そして、社会の仕組み、それをいちおう真似をする。それは分かりますけれども、しかし、時代が下るにつれて、ますます分かれてしまったということがあります。私がよく言うのですが、一つは、日本で言うと中世になりますけれども、中国の時代区分で、たとえば唐の末期、そして宋の時代には、社会の主役はいったい何なのだという事を考えてみると、日本と中国はだいぶ違うということがすぐに視野のなかに入ってくるだろうと思います。

たとえば宋の時代になると、中国では、一つ非常に明らかな移り変わりというのか、あるいは変わり方というのか、一種の歴史の変化が現れてきました。簡単に言うと、士大夫とよく言われていますが、現代流に言いますとインテリの人たちが政治舞台の前面に躍り出ており、社会の主役として活躍する。これは中国の文化の形成、あるいは中国の歴史の移り変わりにとって、非常に大きいと思います。逆に日本は、中世に入ってから源平の台頭があり、武士たちがいちおう文化の担い手として成長してきたということが、まず一つ言えるだろうと思います。そういう社会の主役というのか、あるいは社会で脚光を浴びている人たち、活躍している人たちが違うということで、だいぶ違います。

中国では、インテリとしての士の人たちが、宋の時代、11～12世紀前後、非常に活躍するようになりました。儒学者とされています。彼らは何をもって飯を食っているかということ、儒学の解析をするということで生計を立てているとも言えるのではないかと思います。要するに、皇帝の補佐をして天下国家というような大きな議論をしており、それで自分の立場を明らかにする。そして、自分の必要性を訴える。こういうことをやってきたわけです。

簡単に言いますと、天についての理解なのですが、宋の時代のインテリの一つの大きな貢献は、天について新しく解釈しなおしたということになるだろうと、私なりに見えています。たとえば春秋あるいは戦国時代、秦の始皇帝の前の

時代ですけれども、その時代は、それこそ中国の伝統である儒学の発祥の時代です。孔子がその時代に生きていました。その儒学は現代流に言いますと、政治学みたいなものです。その基本的な主張としては、修身齐家、治国平天下というようなことを自分の基本的な理想として主張し、それでもって自分の行動を律するということになります。

けれども、「論語」などをお読みになったらすぐにお分かりになるだろうと思いますが、孔子自身は苦難続きの生活だったのです。いろいろな苦しい境遇を経験していました。逆に言いますと、孔子は生きていた時代にはそれほど尊重されていなかったと言えるだろうと思うのです。

漢の時代になると、比較的儒学を尊重するようになりましたが、孔子の説を勉強する儒学者たちは、あくまでも皇帝には太刀打ちができないという、政治的な立場でした。しかし、宋の時代になると、一つ大きな解釈が出来ました。すなわち、天の概念の再解釈です。孔子は春秋・戦国時代にシャーマンの世界と祖先信仰からある程度抜け出て人文精神を前面に出して強めていました。「子、怪、力、神を語らず」と言って、世の中の人倫を中心にして儒学を発展させた。漢の時代には、たとえば「天人合一」と主張されていました。天の世界と俗の世の中、この両方が一致しているというふうに主張されます。宋の時代になると、まさに一歩進んだわけです。仏教・道教もとり入れて、宇宙論と同時に、「天」を再構築しました。つまり、「新」儒学では、天が絶対的な存在である。では、皇帝はどうなっているかという、中国の言い方では、皇帝は天子とされています。天の息子なのです。

世界のそれぞれの民族では、君権神授というような神話があります。たとえば日本では現人神ということで神様ですが、中国ではそうではなくて、天子です。天があって、その息子として、天の代理として、世の中を統制している。こういう基本的な論理の枠が出来てきたわけです。

だとすると、どういうことになるかという、皇帝が絶対的な存在ではなくなってしまった。たとえば秦の始皇帝の時代は、皇帝として絶対的な権力を持っているばかりではなく、論理的にも、天というような考え方がそれほど強いものではなくて、むしろ世俗の政権が絶対的な存在だと見られていました。しかし、漢の時代を経て宋の時代になると、天子として存在するわけです。要する

に、「理」と「氣」の世界から言えば、天が絶対的なもので、それに従っていれば、その息子として、皇帝が世の中を支配する正当性が出てくるわけです。もし、天の意志に従っているのではなくて、それに逆行するということであれば、天の意志に従ってこの皇帝の支配を覆すことができるという論理になります。

天の意志をだれが解説するかということになりますが、これはわれわれ儒学者だ、士だ、インテリだ、ということになります。儒学が体制教学化されていく政治的雰囲気に加えて、科挙制度も整備されていく中、「士」は一躍時代の寵児になりつつあった。だとすると、皇帝の権力にある種の制約を与える立場にある士というものが出来たわけです。しかし悲しいかな、士の役割がそれになっているわけですから、同時にそれによって制約されてしまいます。つまり、修身齐家、治国平天下というようなことでやっていって理論的な枠組みをつくり上げ、それで天の意志を解釈する。これが自分の基本的な仕事になるわけです。簡単に言いますと、理論的枠組みあるいは思想の構築、それを解釈する、そういう仕事は基本的なものになってしまいます。そして、それがそれから綿々と続いてきています。

皆さんは中国の人たちの話をすると、たぶん文人という話が出るだろうと思います。絵がうまい、歌がうまい、だけど実際になると、何もすることができない。こういう人たちは優雅な生活をするかもしれませんが、実際の仕事となると、何も役に立たないというようなことがよく言われています。実はそれは儒学者の末流になるわけです。

足立原 秦の始皇帝の時代、たとえば税制だとか、度量衡や文字を統一するとか、天下を平和にしていくための秩序をつくっていくうえで、文化政策を実施するわけですね。そういったものの担い手たち、知恵を与えたりするのは、知識人たちだったはずです。そして、そこから果実として、さまざまな科学や技術に相当するものが出てくる。たとえば時計のようなものが出てくる。紙の発明、それから何といっても、人類史上たいへんな発明の印刷術。

このようなことがあったにもかかわらず、また、そういうものを日本がずいぶん学んでいるのですが、どうしてそれが近代にまで至らなかったか。人類文明史上、非常に高い科学文明を築いた中国が近代科学の面で欧米に立ち後れ、そのために欧米列強による植民地化の対象になってしまう。それを日本はそ

で見ていた。そのあたりを高先生はかなり研究されているのですが、先生から見たそのへんのところを知りたいですね。

高 あとで総長から、技術の能力というものは、いったいどういうものがそのなかに含まれているかというようなお話が出てくるだろうと思いますが、たとえば印刷術は宋の時代に出来上がりました。けれども、それは一種の知識としてであった。そのときはたしかに出来上がった。あるいは火薬。これは非常に大きな発明だと思えますが、また、一種の知識として成り立つかもしれないけれども、それをいかに活用するかという話になると、まるきり違った方向に行ってしまいます。中国では火薬の使い道がまず一つ考えられる。そして最初の使い道は、祭りをやるときにそれでもってお祝いをする。あるいは、神様を拝むのに、それでやる。そのようなやり方で、火薬がそちらのほうに使われるようになってしまいました。

社会の仕組みとしては非常にきっちり出来ています。たとえば江戸時代には士農工商と身分制を非常に厳しく敷いておられましたが、中国の唐の時代は、まさにそのような時代です。貴族があり、それぞれの名字、それぞれの一族、これによって社会における地位が決まってしまったのです。それに対抗するものは、士大夫、インテリ、知識人たちですけれども、知識人たちは、今申し上げましたように、理論の枠組みをつくっておいて、それで自分の存在価値を主張する、そちらに力が行くわけです。だから、具体的な技術となると、むしろ非常に疎いのです。

後ほど、たとえば近代になると、どのように反省しているかというような話をしたいと思いますが、そのときからすでに、文化の志向性がどうも違うということになっているのではないかと思います。

11～12世紀の宋の時代は日本の中世が始まったばかりのころでしょうか、10世紀から国風文化というものが出来、そのあと日本は中世、鎌倉時代というふうになっていくのですが、日本が中国とだいぶ違うところは、士大夫のインテリというのではなく、むしろ戦場で戦う武士たちが社会的に活躍をする時代になります。これは一つ非常に大きな違いです。中国の社会の主役として活躍している儒学者たちは、主としてものを考えて理論をつくるというようなことに没頭するのですが、それに対して日本の武士たちは、戦場で戦うわけです。

まず、戦闘の技術を身につけなければ、やられてしまいます。戦場で相手をやるか、相手にやられるかということですから、戦闘の技術をよく練習し、それを身につけて熟練する。その熟練の技術が重要視されるようになります。私はよく言うのですが、一挙手一投足、手の振り方一つ、あるいは足の踏み方一つによって、やるか、やられるかの大きな分かれ目になってしまうだろう。そういう世界です。

そういう世界の一つの特徴として、技術に対する重要視が共通の認識としてある。13世紀、14世紀にはそれが非常によく出ています。今でも、たとえば中世の日本の文献を調べてみると、その当時の日本人の考え方は、具体的な細部を非常に重要視する。逆に中国の儒者たちは、大きな話ばかりやっていたわけです。技術のような話になると、全然話にならない。むしろ、俺たちはそんなことは全然関係ない。皇帝の補佐をやっているって天下を平和にするのがわれわれの仕事なのだ。技術というものにわれわれがタッチすることは全然意味がない。そういう基本的な志向性で、分かれてしまった。そういう時代の流れになっているのではないかと思います。

足立原 武士の戦闘の技術の話が出たところで、問題がかなりはっきりしてくると思うのですが、科学・学問と言われるものは、物事の原理法則の体系であるのに対して、技術というのは手段の体系です。そのために重要なのは目的です。何の目的のためにこうするのか、こういうものが必要なのかということです。その手段の体系として、いろいろな技術が出てきます。戦闘の技術、人心掌握の技術、ものづくりの技術、ものを運搬する技術、ものを売買する技術など、ある目的に従った技術が出てきます。

高先生はいみじくも、中世日本の主導権を握った武士というものがいたとおっしゃいました。その武士という存在が、戦闘の技術を通して、中国の知識人たちが世の中のデカイことばかり言っているのに対して、かなり身近な、一挙手一投足という言葉に現れるような細かい技術を検討せざるをえなかった。それは、生きるか死ぬかの問題だから。デカイことを言って、ものを書いて、飯が食えるという世界ではないわけです。先生はそのへんをご指摘になりたいわけですね。

高 文化の流れとしては志向性が全然違うわけです。

清成 もう一つ、議論の媒介、媒介する理論が、必要だと思います。中国の場合、ガバナンス（統治）のための学問体系が形成されていきます。日本の場合、武士が戦闘するというけれども、その背景にあるのは経済です。基本的には、武士が農業開発をやるわけです。開墾をやって、新田開発を全国的に広めていきます。従って、武力の争いといっても、結局、経済の争いになります。

そこで画期的な変化が起こったのは戦国時代です。武士といっても、平安から鎌倉の段階では農業はまだ大家族制の農業です。それが戦国時代に、今でいうと核家族がベースになった農業に変わっていき、それで生産性が飛躍的に上がります。生産性が飛躍的に上がったのが濃尾平野で、だから、濃尾平野を制する者が日本を支配するというので、斎藤道三はわざわざ岐阜にやってくるわけです。信長が台頭したのもそれが理由です。濃尾平野は生産性がいちばん高かったのです。

核家族になって農業生産性が非常に上がった。そして、当時は農と兵が分離されていない。だから、秀吉が貧困家庭の出というのは全くの間違いで、単婚家族の生産性の高い農業地帯の、たいへん裕福な農家の出で、力があるわけです。そういうところで力を下から握っていくのが蜂須賀小六や何かです。結局、信長はそういうものをうまく使っていったわけです。

背景にある農業生産性が飛躍的に上がったこと、その背後の、社会構造、家族の構造の変化をちゃんと見ていて、それにいちばん鋭敏だったのが秀吉です。だから、自分で天下を取ると兵農分離をやってしまう。太閤検地もやる。ということで、完全に新しい仕組みをつくっていくわけです。そういうときに、中国の統治のための学問はほとんど役に立たないということです。

日本のほうで、きちんとした、客観的な学問体系として、日本的な統治の仕組みの学問は発達しなかったかもしれないけれども、制度設計はそこでものごく進みます。兵農分離で、だから刀狩りをやる、太閤検地をやる。そこで、極めて見事な封建制が出来上がっていく。そこを体系化したのが家康ということになってきます。

家康が支配してから、今度は統治の学問体系として儒教を入れてくるという格好です。しかしベースの、庶民階層は儒教にはなじんでいなかった。そういう二重の構造があります。そういうベースのところから明治以降の近代科学に

適応するような動きがあったのではないか。もちろん、寺子屋などもそうです。そういう儒教の体系、統治の体系、士農工商の士のところではなくて農工商というところが、近代技術体系に適応できるような準備を実はしていたというのが、徳川時代ではないか。それに目を開かせるような、客観するような刺激を与えたのが蘭学である。今のお話を伺っていても、どうもそういう気がしてならないのです。

昨年の秋だったか、若い人の書いた論文がちょっと話題を呼びました。戦国時代に濃尾平野で一種の社会革新が起こったということを若い人が論文に書いて、それを西村という東大教授がたいへん高く評価したのです。けれども、その説はもう50年前に安良城盛昭という人が本に書いていることです。それは日本の経済史の通説にもなっています。しかし、そこを深めた人が実はいなかった。安良城仮説が珍説だという扱いに半分はなってしまったところが非常に不幸だったということです。

もう一つは堺です。技術でも何でも、結局、堺を経由して入ってきます。そして、先ほどの濃尾平野で、信長は鉄砲でもすぐに使うわけでしょう。現実には戦闘の道具として活用していくわけです。そういうときに技術変容が起こってきます。日本でも戦国時代以降、外来技術を導入しても、それが変容するというのが、そこで非常にうまく始まっていたわけです。それが連綿と続いてきて、たとえば徳川時代の場合には平賀源内ということになるし、幕末では江川太郎左衛門、佐久間象山、そういうところにみんなつながってきます。ですから、大きな変化の原点は戦国時代にあって、その種をまいたのが高先生が言われたような、武士の存在であったという感じがします。

高 一方、儒学者たちの使命感は非常に強かった。彼らは「修身齐家」「治国平天下」と主張して、自分の道徳も入っているけれども、究極的な目的は「平天下」ということです。今、ガバナンスというお話が出てまいりましたけれども、帝王学というのでしょうか、あるいは政治学と言いますか、そういう性格あるいはそういう匂いが非常に強い学問の体系だと思えます。

それと比べると、たとえば戦国時代には日本の社会の主役として武士が活躍していた。それで、戦闘技術が発達する。戦闘技術が発達するということは、表面上は戦闘技術ですけれども、そのバックにはいろいろなものがたくさんあ

るわけです。帝王学と比べてみると、日本の学問であれば、実用的な性格、たとえば実際の農業生産。たとえば戦闘をするとき、実際にいかに戦闘技術を熟練させるか。たとえば戦闘の道具として世界で著名になっている日本刀をつくる技術。それを実際につくっている人たちは職人です。職人氣質とよく言われていますが、私が見たところ、一種の思考パターンとしては細部志向が非常に強いと、いつも考えさせられるのです。

中国の儒学者の話は空論と、佐久間象山も批判しています。実際の生産活動あるいは戦闘活動には全然役に立たないと批判しているわけですが、社会そのものは全然知らない。政治学として、いかに天下を治めるかというようなことで議論をするばかりです。それと比べてみると、日本では、士というものは武士です。武士というものは中国の士とはだいぶ違うわけです。これがまず一つ。

それから近世になると、まさに家康の時代になりますが、朱子学を持ってきます。けれども、蓋を開けてみると、その朱子学は社会に浸透しているのではなくて、どうも浮いているというような存在です。家康は統制をするわけですが、その正当性を裏付けるために朱子学を持ってきました。要するに階層がある。士農工商がある。そして、同じ武士のなかにも旗本だかと外様だとか、いろいろ階層がある。これをいかに理由づけ、説明するか、いかにそういう連中を納得させるかという大きな課題があったわけです。

今、総長がおっしゃいましたが、兵農分離です。それこそ放馬南山です。南の山のほうに戦闘用の馬を全部放して、これからは戦闘などやらないよ、これからは文化の時代になりますよというようなことで、何らかのイデオロギーがやはり必要になってくるわけです。それで朱子学を持ってきたのです。

当時の家康の正当性、階層の基本的、原理的な根拠、そういうものを説明するために朱子学を持ってきたわけですが、朱子学そのものは中国では帝王学になっているわけです。日本では、私に言わせていただくと、ちょっと酷かもしれませんが、林羅山は家康の秘書みたいになっているわけです。武家関係のさまざまな文書をつくったわけですが、そのアイデア、あるいはその基本的な発想は、全部家康のほうでやっています。だから、朱子学は一種の飾りというのでしょうか、二重構造と総長がおっしゃいましたが、まさにそのとおりです。

つまり、それでもって正当性をつける。それでもって説明する。それだけの話です。そして社会の秩序、それだけです。しかし、社会の仕組み、社会自身の動き、あるいは社会自身がこれから運営されていくわけですが、これは朱子学と全く関係なく、たとえば士の下には農工商があります。家康の時代には、自作農を中心にして経済を成り立たせるということ考えているのではないかと思う節がずいぶんあります。要するに中間搾取、中間ピンハネをなるべくなくし、家康が下のほうからストレートに吸い上げる。そういう社会構造にしたと思ったのではないだろうかと思うのです。

士農工商となっていますが、中国では士は読書人です。儒学者というのは読書人です。要するに本を読んで科擧の段階をのぼって出世していく。こういう人たちは、読書をもって自分の一生の究極的な目標にしています。だから、技術あるいは実際の生産活動には全然タッチしませんし、それには全然興味を持っていません。当然のこととして、技術は重要視されません。

私が研究している対象の一人に、嚴復という中国の思想家がいますが、嚴復という人はイギリスに行きました。イギリスに行って、イギリス近代の自然科学をかじって戻ってきました。彼は、これも変な話ですが、軍艦の艦長というようなことでイギリスで2年間勉強したのですが、船に乗ったことは一回もありませんでした。

彼は、中国はこういうやり方ではいけないだとか、思想的にいろいろなことを考えさせられたわけです。たとえば中国の雲南省のほうに行ったら、そこには銅の鉱山がいっぱいあるのですが、地元のおじいちゃんにはそれが非常によく分かる。そこへ行って、山のかたち、山の石の色、山の周りの雰囲気、そういうものを見て、ここには銅の鉱石が必ずあると判断できるわけです。嚴復の言うところによると、こういう人たちは本当は自然科学者であって、近代のヨーロッパ社会では専門家として認められる。しかし、中国では専門家どころではなく、むしろ、普通の人たちであって、その価値を全然認めない。要するに技術や普通の実活動などは重要視しないわけです。

孔子が言ったのですが、野菜をつくることは自分は知らない。あるいは実際に農業の活動をやるということならば、自分に聞いたってしょうがない。自分はそういうことは全然知らない。お前はそんな話ばかり私に聞いているのだが、

お前は器ではない。全然将来性がない。要するに具体的な技術という話になると、全然対象にならないという基本的な発想です。

ですから先ほど言ったように、一方では巨大化志向、一方では細部具体化の志向、これはだいぶ違うということになるのではないかと思います。

足立原 戦闘技術の問題に戻りますが、日本に先立って中国にも戦国時代が繰り返されます。そういった時代の中国における戦闘技術を支えるものは、日本の武士のようなものではなかったわけですか。その陰に職人の活躍する場もなかったのですか。

高 痛いところをつくお話ですが、中国の戦闘技術はいったいどうなっているかという、一つは、同じ戦国時代という名前の時代がありましたけれども、戦国時代とはどういう時代かという、一方ではすでに周王朝が上のほうで押さえているわけです。もう一方では、儒学者ばかりではなく、韓非子などの法家が活躍していました。こういう人たちは漢の時代以降になると、どんどん削られてしまって消えてしまいます。その後、いちおう平天下ということになりますから、だいたい統一というかたちになっていますが、戦闘技術といっても北のほうのモンゴル民族たちとの戦闘です。そういう戦闘になると、全部、王朝の政府が押さえているわけです。皇帝、王朝、そして王朝の周りの儒学者たちが、基本的の方針を決めていて、やらせるというかたちになります。自分で意欲的、積極的に戦闘するというよりも、上のほうの命令に従ってやる。これはもうだいぶ違います。

総長がおっしゃったように、日本の戦国時代にはそれぞれの武士たちは自分のところの農業生産を守り、それを発達させて、どんどん拡張していきます。意欲的に戦闘しているわけです。中国の武将たちは皇帝の命令に従って行動します。戦闘のほうはよく出来るかもしれませんが、上のほうの判断と違ってはにしても、その命令に従う。それしかないわけです。自分の自立性というものはないわけです。そのへんはだいぶ違うのではないかと思います。

清成 日本の場合、戦国時代以降、農村のなかに職人が住み着いています。いろいろな職種の人が出て、一種の農と工の社会的分業関係があるという構造の農村になっています。それが基本的に戦闘の技術を支えるようなところになるのですが、中国の農村は農業に純化しているということですか。

高 ええ。たとえば天下統一ということになりますと、単なる農業、田んぼを耕すということで税金も相当重く、吸い上げられていくことになります。中国では、先ほど天と天子の話をしましたが、要するに易姓革命です。どんどん土地が集中し、貧富の格差が大きくなって、今度は反乱が起きる。だいたいこういう循環が2000年ぐらいつと続いていました。その場合、全体の平天下ということで非常に大きな課題になるわけです。平和の時代にしても戦乱の時代にしても、これは非常に大きな課題になるわけですから、儒学者たちが主役として活躍する。その場を得られるわけですし、彼らの基本的な思考パターンも社会に浸透していくわけです。

清成 ヨーロッパの場合、都市が形成されて、そこに職人が住み着くというかたちになります。こういう職人は近代科学に対応できなくなるのですが、しかし、そこに職人が大量に住み着く。その職人に2通りあって、王侯貴族のために働くのと、庶民向けのものとあるのですが、中国の場合、たとえば北京のような都市に職人層が形成されるというようなことはどうなのですか。

高 これは歴史的に検証できると思いますが、非常に優れた技術を持っていて、いろいろなものをつくり、王侯貴族、皇帝さまに献上する。層としてある程度出来たかもしれません。庶民のほうは、それほど定着しないと云いますか、それほど重要視されないと云いますか、そういうことがあります。

中国の教育体制もそれと全く同じです。つまり両極端です。一方でエリートのほう、上のほうの層は、恵まれているというのか、皇帝に仕えているわけですから生活も安定する。一方、末端のほうは全然重要視されませんし、自生自滅というようなかたちになっています。たとえばインテリとしてもそうです。エリート教育は相当発達しています。科挙の受験のための教育、今の塾のようになっていまして、いかに科挙に受かるようにするかという教育が発達します。一方、庶民の段階では、そろばんぐらいできればそれでいいのだ。商いをするときは間違いがたぶん出てこないだろう。それだけで十分生きていける。だから、庶民段階の教育はそれほど発達しない。それと技術の話とまた関連していますが、教育はそれほど普及していないということで、精神世界の志向性も当然問題になります。

清成 日本は、幕末近くになると各藩が産業を興そうという政策を取

ります。たとえば上杉鷹山などは典型です。産業に着目し、当然、市場経済も発達してきますからそれに対応していこうというような動きは、支配階層にはあまりなかったのでしょうか。

高 というよりも、中国の儒学の伝統から考えてみますと、何回か改革の機運は高まりました。いわゆる経世学の志向です。つまり、役に立たない学問を勉強したってしょうがないのですから、世の中に役立つようなものを研究し、勉強して、それをやろうという機運は何回も高まってきますが、そのたびに抑えられてしまいます。たとえば王安石などです。何回かあるとなると、いちばんトップの皇帝としては自分の支配の正当性を脅かされるという感じになり、削ってしまう。そのようなことが何回もありました。

だから、これまた変な話ですが、支配の安定ということは、すなわち社会の安定につながるというふうに考えられます。単純再生産の考え方を持っていました。要するに、人口が増えるが、土地と産物が増えない。その結果、民の間では不足が生じて、争いが起こる。社会も乱れる。これを防ぐためには、低水準で平均的な生産性を維持させる。これが儒学の最も根本的な欠陥です。だから、技術の発達はおろそかにされる。逆に言いますと、遅れている状態で安定する。どこかバランスが崩れてしまい、たとえば技術的に非常に優れたよいものができていて、経済的力として蓄積されているとなると、上のほうはそれを抑制する。そういう社会の仕組みは封建社会にはずいぶんありました。

足立原 以前におこなった高先生との話し合いのなかで、かなり完成したかたちの日本の封建時代といわれる江戸時代に、土農工商で商の上に工があったというあのへんの話も非常に面白かったのですが、中国の場合は工より商が上に行ってしまうんですね。

高 そうですね。日本では工をある程度重要視する、それを育成するというような意味があるのではないかと思います。たしか、城下町には工の層が相当厚く、それが技術のベース（基盤）になるのではないのでしょうか。この前、先生にお話ししましたが、人間国宝の話ですよ。そういう発想は日本の文化でないとできないのです。中国の文化では「人間国宝」という発想は考えられません。

一つには、技術そのものをそれほど重要視していない。もう一つは、技術と

いうものは、技術だけではなくて、技術の担い手としての人間そのものが大事にされなければいけないという発想です。ですから、単に手先が非常に器用だというばかりではないのです。戦闘技術もそうですが、そのなかに頭脳が入っているわけです。技術といっても、頭脳も知力も入って、手先も入って、いろいろなものが入っているわけです。そのへん、日本は一つの伝統としてずっと受け継いできていて、ものづくりの国と言われていますが、戦後は高度成長があって製造業が非常に大きな力になっているわけです。

私が見たところ、これは戦後だけではなくて、すでに中世にはその基本的な源泉が来ています。中国のほうはそれとは違うわけですから、それをなかなか受け入れようとしなかったということもあります。

これまた変な話ですが、開明の姿勢をとった洋務派の人達も、たしかに、西洋の武器、西洋の兵器はいいけれども、これは買えばいいのだ。自分でそれをつくるなどというのは面倒だ。自分たちは平天下を課題にするのだから、そういうものは全然問題にならない。むしろ、問題外だ。買ってきて使う、それでいいではないか。こういう基本的な発想があります。李鴻章たちもそうだったのですが、そのへんは非常に違うのではないかと思います。

足立原 私の父はチリンチリンと鳴る鈴をつくる職人でした。神社に下げる大きなものから、御神輿につける鈴、女の方が根付につけるような鈴に至るまで、鈴にもいろいろあります。石川県には九谷焼の鈴があるし、その向こうへ行くと竹の鈴があるし、岩手県に行くと南部焼の鉄の鈴があるという具合ですが、私の父は真鍮鈴をつくる職人でした。空襲で焼かれて、兄も私も跡を継がなかったからつぶれてしまったのですが、子供のころを思い出しますと、父のところに来ていた職人の弟子たちが父に手先の技術やいろいろなことを教わります。私自身、人生いろいろ生きてきたなかで振り返ってみると、職人の親方はものづくりを教える師であるけれども、同時に人生の師であったのではないかと思います。弟子たちは言わず語らずのうちに暮らしのうえでの躰けやいろいろなことを教わる。そういったものが作品に現れてくる。

私は今作品と言いましたが、自分の父のことを言っただけなんですけれども、父は業界ではちょっと名の知れた職人として、名前が銀蔵でしたから、屋号を鈴銀と言いました。父は、今思うと「製造した」と言わなかったのです。「製

作した」と言うのです。ですから、私の家は足立原製造所ではなくて足立原製作所でした。その看板を今でもはっきり覚えています。

つくったものは製造した製品ではなくて、製作した作品なのです。たまたまその話をしたときに、高先生は「作るねえ。なるほど、心がこもってますね」とおっしゃってくださいました。そういうふうにならざるに中国の方に言われて、私はうれしかったですね。「製造の造と違って、製作の作は心がこもっていますね」と先生はおっしゃった。父がうちに来る職人の弟子たちに厳しく言っていたのは、「始末」ということです。「道具の始末をきちんとせえ」「製作した作品の始末をきちんとせえ」というようなことを盛んに言っていました。

製作した作品の始末をきちんとするというのには二つ意味がありました。作り損なうと恥をかくのだというのが一つ。恥をかくようなことをするな、きちんとせいと。もう一つは、今で言うところのリサイクルです。作り損ないを残しておくのではなく、つぶして地金屋に戻せということです。ちゃんとリサイクルなのです。作り損ないを残すのではなくて、作り損ないをちゃんとつぶして地金屋に戻せ。そこに作り損ないをさらしておいて、恥をさらすなというようなこと。

だから今思うと、職人の親方は単なるものづくりを教えるだけではなくて、ちゃんと人生の師であったなと思います。

今、先生が、人間国宝などという発想は中国人はともしない、日本人だから出てくるとおっしゃいました。私はきょうの課題をあえて日本の「技術の文化」としました。文化そのものに対するさまざまな切り口があり、「言語の文化」、「社会の文化」、価値観の問題、芸術の問題、宗教の問題を取り上げる「価値の文化」。そのなかで、目に見えてははっきり分かる「技術の文化」という点で、古来から長い期間、日本は中国から学びながらも、それがどんどん分かれてきた。分かれてきたのはどうも中世あたりだろう。社会の主役が代わってきたからだというふうなことですね。

このへん、どうでしょうか。

高 製作の話は、まさにそのとおりだと思います。たぶん、総長からまた技術の内容についてお話があるだろうと思いますが、私が申し上げたいことは、職人氣質といっても、技術といっても、そのなかには心のこもっているところ

がある。あるいはちょっと変な言い方になるかもしれませんが、魂がそのなかに入っている。技術というとき、そのなかにはすでに頭脳・知力というものも一体化しているわけです。

中世の芸の話になりますが、心身一体とよく言われます。心と身が一体になっているのだということは、技術は単なる表面の手先、あるいは表面の技術だけではなくて、このなかにはすでに頭脳、知力、そして精神力、そういうものが入っているのだ。ですから、日本では剣道、柔道、茶道というふうに言います。「道」をつけるということは、このなかには精神的な要素が入っているのだ。単なる一つの儀式、単なる一つの技術、単なる一つのやり方ではないということ、日本の文化としては主張するわけです。

たとえば先ほど武士の話が出ましたが、佐久間象山と同時代に生きていて、好一對を成している横井小楠。この二人はよく喧嘩をし、よく主張が対立していましたが、それほど会っていない。横井小楠は『国是三論』を書き、そのなかには士道というものがあるわけですが、彼が主張したところは、武には文があるということです。つまり、文武両道が入っているわけですが、われわれ武士としては、武のなかにすでに文が入っているのだ、それがなければ武士にはならない、普通の百姓とあまり変わらない、ということをも主張するわけです。

コンテキストとしてそれをとらえてみれば、戦闘技術にしても、自分がやっていることにしても、このなかにはやはり魂がなければいけない。精神力が必要になってくる。そういうことになると、技術というものは非常に重要視されることが必要になります。

足立原 今のお話で思い出したのですが、高先生は「近代初期の日本の二種の将来展望に関する研究」という表題で、「佐久間象山と横井小楠の国際政治戦略」という副題のついた論文を、1999年に『日本学刊』4号にお書きになっていますね。今のお話を伺って、改めて読みなおしてみたいと思います。私、そこまで細かく読んでいませんでした。横井小楠ね、なるほど。

高 特に非常に細かな、微視の世界では、日本人たちは尽きることなく極めていくことが多い。入念に入念に、心をかけて心をかけて、非常によく磨くというようなことをやっていますから。たとえばチップだとか、そういうもの

を本当に精巧につくっています。そのへんは、技術というものがあって、精神力あるいは知力がそのなかに入っているということになるわけです。これはものづくりの一つの伝統として受け継がれているし、これからも続いていくだろうと思います。

足立原 先ほど言語の文化だ、社会の文化だ、価値の文化だと言いましたが、文化現象の一つとして技術というものを見たときに、日本の文化現象の特徴をいくつか組み上げていただけませんか。

清成 近代科学が定着したのは、客観性、体系性です。それで、完結性があるわけですね。それに対して、先ほどのお話からだ、職人の魂のこもった製作というのが町工場に引き継がれます。その町工場が近代科学による技術にみごとに適応していくのが日本です。

しかし、その間に飛躍があるのかもしれないということにはなるのですが、すでに幕末の時点で、日本の職人層は、近代技術の変容というのか、受け入れて、導入して変容するというようなことをやっているわけです。一つの典型的な例は、明治5年に群馬県富岡に国営製糸所が出来た。生糸をつくる製糸工場です。投資額が20万円でした。

足立原 当時の20万円はたいへんな投資ですね。

清成 それに対して、その2年後に長野県松代では村の鍛冶屋、大工を使い、富岡の場合にはフランスの機械の輸入ですけれども、それを解体して日本式につくり直す。投資額は2,600円と、はるかに安い。ところが、その翌年にはもう、諏訪の平野村でもっと進んだことをやってしまいます。諏訪方式の製糸機械をつくってしまうわけです。その投資額は極めて低くなります。しかも、それが村の鍛冶屋や大工で行われ、足りないところは松本から鍛冶屋を連れてくる。それでつくった諏訪方式の機械の性能が極めてよかった。それがアツという間に日本中に普及し、日本の生糸輸出が明治時代にもものすごく伸びて外貨を稼いだ。その外貨で鉄鉱石や工作機械等を輸入していくわけです。

そういう製糸機械から今度は機械織りの機械に行って、それが自動織機化していく。それが機械工業の発展にどんどんつながっていく。そういう連続性があったのです。しかし、連続性があっても、その連続の間でときどき飛躍する。

昭和13～14年に山口貫一という人が、『熟練工問題の研究』という本を書い

ています。山口貫一さんというのは国鉄の技師で、国鉄の技術を上げなければいけないという際に、日本では工作機械が生産できない。熟練の質も、近代科学に対応していく場合には変わってくる。どんどん高度化する。いったい欧米ではどうなのかというので、アメリカとヨーロッパを当時のことですから2年かかって調べて、職人の形成、熟練工の形成を調査してきて本にしているのです。これは見事なものです。

それで最終的には、工作機械を操作することは日本はわりと簡単にキャッチアップするだろう。しかし、工作機械というのはマザーマシンですから、それを自分たちで開発し、性能のよいものをつくるのが大事だけでも、それができるだろうかということなのです。しかし、それも戦後、日本は見事にやっしまいました。

これは全部、内発的な力です。しかし、外から技術は入れても、すぐにそれは変容してしまいます。その場合に、先ほど重要なことをご指摘になったと思うのですが、われわれが日本の中小企業の基盤技術を分析してみると、問題把握力や問題解決力というのがまず先にある、それから手作業等が非常にうまいというようなことがもちろんあるのですが、結局、手さばきだとか、加工組立、他方で、おっしゃったような感覚です。関知力がなければならぬし、そこに経験知を蓄積して行って、客観化していくとか、そういう総合的なものとして、職人から日本の中小企業へと形成されてきます。

それで、先ほど職人の親方が人生の師だとなご指摘があったのですが、昭和30年代以降の日本の中小企業は、ものづくりの場合、中小企業そのものが将来の中小企業経営者のための学校なのです。だからみんな中小に入って、渡り歩いて、そして独立していくというのが、ものすごく活発だったわけです。そういう現象は中国ではなかなか根づかなかったということですか。

高 根づかないですね。

清成 今、生産機能がどんどん中国に移っています。それが根づくかどうかという見通しはいかがでしょうか。

高 今の職人の話と関連しているだろうと思いますけれども、私がいつも感動させられるのは、たとえば鉄砲の伝来です。鉄砲が伝来し、時亮という名主がどこかの職人に「お前、それをつくれ」と、現代流に言いますとコピーを勧

めた。けれども、そのコピーができない。かたちも出来るし、いろいろなものが出来るけれども、その部品のなかには螺旋状のものがあるでしょう。それが出来ない。ネジが出来ない。

私の見たところでは、職人の技術にはどうして魂が入っているかという、技術を自分の命としているわけです。結局、どうやったかという、その娘をポルトガル人に嫁がせたのです。そして翌年、ネジのつくり方、螺旋のつくり方が分かるポルトガル人を連れてきた。それで、いろいろ教えてもらって、ちゃんと立派なものをつくった。命をかけてやっているわけです。そのへんは今の総長のお話ですけれども、昔の中国のインテリといったって技術者といったって、命をかけてやる、そこまでの心掛けというのは、ちょっと疑問に思います。

ですから、根づくか根づかないかということになるわけですが、中国でも現在相当議論されていますけれども、コピーをして、その内容を自分の知識として身につけ、今度は自分でつくるとというのが、一つだけ成功したことがあります。カラーテレビの生産ラインと洗濯機の実験ライン、あれは全部日本です。日立にしても東芝にしても、中国に投資して生産ラインをつくって置いて、そこでものをつくるわけです。その過程でノウハウを勉強するわけです。もちろん、日本は産業のグレードアップをやっているわけですから、それを切り捨てているわけですが、中国はカラーテレビにしても洗濯機にしても、それを本当によく勉強して品質の安定したものをつくっていった。そして今、中近東に相当輸出しています。

けれども、私は一つだけ疑問に思うところがあります。そういう比較的簡単なものは、今の段階でコピーして技術を習得し、つくるということができるかもしれませんが、もう少し先端的なもの、もう少し魂が入っているものになると、まだまだだと思えます。時間がかかるだろうと思えます。ですから、空洞化の話ですけれども、たぶんそこまでは深刻に考える必要はないだろうと思えます。

それぞれの分業がある。中国の現状から見ると、バックというのか後背というのか、そういうところを考えなければいけない。技術に対する基本的な考え方、基本的な姿勢、そして、そういう人たち。日本では戦後、列車に乗って集団就職というのがありました。要するに基本の教育を受けて都会に行き、工場

に入っているいろいろな生産ラインで仕事をする。今のところ、それに徐々に近づいているというような段階に来ていますが、それ以上はこれからだと思います。

清成 富山県の例だと、YKKですよね。YKKは最初に大阪でやっていたのですが、スライドファスナーでの大手企業はヤスタという会社で、従業員が8,000人いたというのです。そのころは布のテープに金属を縫い付けるのを手作業でやっていました。ところがYKKは、戦後、興銀から2万円ぐらい借りてアメリカに行き、自動植付機というものを買ってきて、それをバラしてしまった。それを何十セットつくって、ワーツと量産をやり、アツという間に業界トップに行ってしまった。だから戦後すぐ、そういう力がYKKには備わっていたのです。

高 もちろん、それまでの蓄積があったのですね。

清成 そういうことです。大阪でスライドファスナーをやっているときに、もう手作業の時代ではない。アメリカにはもう自動機械があると分かっていたから、そこにどうやってキャッチアップするかというようなことですよ。しかし、実際にYKKがやろうと思っても、今度は素材面でインフラが整っていないのです。だから、自分たちでそれをやらざるをえない。YKKは素材まで一貫でやらざるをえなかったのです。

高 だから、後背が相当広いですよ。あるいは裾が広いというか。

清成 そういうことなのです。ものづくりというのは、何かで突出するというのはなかなか難しいのです。やはりいろいろなものがワンセット、裾野がずっと広がっていないと無理だ。その裾野を日本は昭和30年代の高成長の間につくっていったのですが、その準備段階は戦争中の軍需工場です。そういう場合に、熟練工をどう形成したらいいかというのが、先ほど言った山口貫一さんの研究です。そういう客観的、系統的な研究も、実は日本はやっていたのです。その山口さんの業績に目を付けた小宮山琢二という企画院の役人が、政策のほうで考えていったということがあります。そのような蓄積が戦後にみんな実ってきたということだと思います。

足立原 フランスから入った製糸機械を日本流につくり替えたとおっしゃいました。当時、20万円という大きな金に対し、村の大工や村の鍛冶屋の手で、何十分の1かの値段ですごいものをつくってしまった。向こうの金属製のカバ

一を銅製のカバーに替えたり、たいへんな改革をやって、何分の1かの予算で優れたものをつくるようになった。そういうことが村で出来てしまうというのは、日本の長い間の蓄積が根底にあったからなのですね。

清成 あったのだと思います。

足立原 たとえば村鍛冶というものが昔はありましたが、徳川300年の平和の時代に、そういう知の働きのできる人たちが村々に浸透していった。どこかの合戦で敗れて落ちぶれたとか、江戸時代で言えば、リストラ武士たちが市井にまぎれ込んで活躍するといったことに引掛かるようなことが、なかっただろうかと類推をしたくなります。

清成 そういう職人以外に、職人がつくった機械を操作する主体、担い手はどうなのかというと、平野村の場合には野麦峠を越えて岐阜から来る貧農の娘さんたちです。だから、ほとんど基礎的な教育は受けていない。しかし、識字率が高いとか、自分で考えるとか、そういったことがいろいろあったのだと思います。

その人たちは一面では「女工哀史」と言われます。ひどい目に遭ったと言われる、その女工さんたちが80歳、90歳になってくると、亡くなられたらたいへんだというので、作家の山本茂実さんが昭和30年代から40年代初めにかけて取材に回ります。すると、女工さんたちが改良や改造の提案をしていることが分かります。つまり、女工哀史ではなくて、もう一つの面があった。女工哀史というほかに、生産に心を配って改良の提案をずいぶんやっていた。だから、女工哀史も事実だけれども、一面、明るい側面があった。『あゝ野麦峠』を映画化するとき、山本薩夫監督がそれを言っています。実際に映画化しようと思ったら、どうも女工哀史の暗い話は一面に過ぎなかったということです。そういう担い手論にまで入っていくと思います。機械を開発する側と、一般的な担い手ですね。

私は改革開放の翌年、79年に中国に行って、日本の高度成長はどうだったかというから、庶民の力が大きかった。知的エリートの果たす役割には限界があって、庶民のレベルが高いからだという話をしたのですが、なかなかそれを分かってもらえなかった。それで、日本の軍隊は、将軍・提督は大したことなかったけれども、兵・下士官は強かった。それで日本軍は強かった。日本的経営

もそうで、大企業の社長などは大したことないけれども、庶民の力で日本は高度成長をしたのだと言ったのですが、中国の人にいちばん分かってもらえなかったのはそこでした。

高 ガバナンスの哲学というものがこびり付いているわけです。だから、たとえば庶民に支えられているということは、もう少し注目されるべきではないか。そのへんは一つ大きな裾というのか、それをつくっておかないと、なかなか進まないですよ。

清成 そのときは日本長期信用銀行がお金を出し、長銀の竹内宏さんと名古屋大学の飯田経夫さんと私で行って、そういう庶民の話をするわけです。そのレベルを上げなければだめなのだという話をして、翌年、長銀が今度は中国の人たちを呼び、中国にどうやって質の高い中小企業をつくるか、ちゃんとしたものづくりをやるかという講座をやりました。第1時間目に長銀の竹内さんが、日本の政府は大したことなかった、大した政策ではないけれども、庶民が優秀だったから日本の中小企業はよくなったという話をしました。2時間目に中小企業庁の長官を呼んできて、長官が、日本の中小企業は大したことない、政策がよかったから中小企業は伸びたと（笑）。

3時間目の講師が実は私でした。それで、私が始めようと思ったら向こうの団長さんが、「ちょっと待って。きょう午前中に全く違う話を二つ聞いた。どっちが本当なのだ」と言うから、竹内さんの言ったことのほうが正しい。ただし、中小企業庁長官は自分の言ったことが間違いだとは思っていないはずだと言ったのです。「どういうことだ」と言うから、政策というのはレストランのメニューみたいなものだ。中小企業者がメニューを見て選ぶ。ところが、取った料理がうまくない。つまり、政策がよくない。しかし、その政策をうまく利用する術に非常にたけている。料理がうまくなければ、自分で味付けをして食ってしまう。何も残っていないから、つくった料理人のほうは政策がうまく行ったと思うだろう、ということをやったら、「なるほど、そういう説明なら分かる」。

そのぐらい、政策受容能力というのか、政策を受け取ってそれを活用する能力が、日本の庶民というのはたいへんなものがあったということなのです。そこなのでしょね。

足立原 日本の最先端技術でも、陰で活躍している職人のすごさとか、大企業を底で支えている中小企業の強さとか、そういうことが今でもよく話題になります。日本は古代から長年、中国からいろいろなことを学んできて、中国は、さまざまな発明を含め、特に科学技術にわたるものまで、人類文明に高度な役割を果たしてきたにもかかわらず、近代欧米にやられてしまった。そして、弟分の日本のほうが伸びてきたようなところがあるのですが、ここへ来て、また新たに巨人が動きだそうとしています。そういった状況下で、日本が恩返しではないけれども、今度は中国が日本から何を学ぶかとなってしまったわけです。

一つには、中国で中小企業法が出来て、中国側もそのへんの重要性に気づきだしたというのか、研究のほうから言いますと、これまで文献中心にやっていた。けれども、私が高先生とお付き合いしていて感心するのは、現場に行きたがると言いますかね。たとえば私の「草刈り十字軍」の現場にも来てくださったし、「人と土の大学」の現場にも来てくださった。先生はよく現場に行こうとされる。そういう高先生の研究姿勢で、先ほどからいろいろ出ている日本の村の大工や鍛冶屋につながる、日本の「技術の文化」の原点に当たるようなところをどんどん研究し、その研究成果を私たちに示してほしいと思っています。

高 きょうは技術の話を中心にして私のほうからもいろいろしゃべりましたし、足立原先生と総長からもお話をいただきましたが、技術という話は、現実に対する基本的な姿勢というものが必要になってきます。たとえば佐久間象山はちょっと変わった人と言われていますが、自分でいろいろなことをやりました。ガラスをつくったり豚を飼育したり、当時の武士としてはたしかに変わった存在だったかもしれませんが、彼の基本的な考え方は、朱子学の理というものは実際に役に立つようなものでなければいけないということで、彼は清談と言うのですが、何も味付けをしていないしゃべりはだめだというふうに言います。また、彼の先生にあたる伊藤仁斎について、「仁斎・東涯をばくす」という短文を書いており、伊藤仁斎というのは立派な朱子学者で、学問は優れているけれども、社会は全然分らない、ということを行っています。

というのは、仁斎が女郎屋さんに行ったところ、カモが来たわけですからもてなしも非常によくて、お菓子もお茶も出してくれ、いろいろ付き合いをして

おり、よかったなと思った。そして、「こんないい人もあると思っていなかった」と感慨無量。また、東涯は妓女の三味線を納める箱を買い、戻ってから自分の家のなかにそれを飾っていたわけです。それで、ほかの人たちが、「先生、こんな変なことはやめてください。これは女郎屋が使っている三味線だから」「いや、そんなことはないよ。この箱のは三味線をいれられるか」と。

要するに象山が言いたいことは、空理空論ではなくて、実際に役に立つものを身につけなければいけないし、それを勉強しなければいけないということです。経験だということになります。彼の経験は、実は近代化の橋渡しの一つになっているのではないかと思うのです。

戦国時代からずっと技術に対する姿勢が、日本のほうでは確立しており、綿々と続いていて、継承されていて、現在のものづくりの基本姿勢になるわけです。ですから私はよく言うのですが、ものづくりというのは単なるものづくりではないのです。そのなかには魂が入っているわけですから、基本的な人生の姿勢なのです。

たとえば中国は世界の工場と騒がれているのですが、本当にどれぐらい出来るか、今のところよく分かりません。そういうところ、日本のこれまでの基本的な姿勢を一つひとつ綿密に分析し、それを自分の姿勢にして、勉強しなければいけないだろうと思います。学ぶということは、そういう基本姿勢から考えるということになるのではないかと思います。単なるコピーでは一時のぎはできるかもしれませんが、根本的には、やはり技術そのものに対する基本的な姿勢です。それが分かっているならば、これからいろいろ役立つことになるのではないかと思います。

アメリカのほうは、セオリーということで非常に優れているところはあるのですが、しかし、応用的技術となると、日本のほうが断然優れているのではないのでしょうか。中国の技術者の話を聞いてみると、革新的な理論、非常に進んでいるものに、魅力を感じるわけです。最近もまたいろいろ議論しているわけですが、たとえば新幹線をつくって高速電車を導入するのに、フランス、ドイツのほうは非常に進んだ技術があるのだ。日本は新幹線があって走っているけれども、技術的には20年前の話だ。技術者たちの間では、そういうことが主張されます。

私に言わせていただくと、では、新幹線を走らせる目的はどこにあるのか。新幹線を走らせて、ものを運ぶという目的があるのではないか。すると、実用的になっていて、成熟している技術を導入し、それを習得するというのが、本来の姿ではないでしょうか。たしかに、フランスにしてもドイツにしても、技術的、理論的には相当先頭を走っているかもしれません。しかし逆に言えば、まだ成熟していないわけです。そういうことを吟味して、基本姿勢としては、この技術のなかには精神というものがあって、それを取り出して勉強するということが必要になってくるのではないかと思うのです。

日本研究というものは非常に幅広いものになるかもしれません。総長の今のお話ですと、技術のなかにはこれぐらいのいろいろなものが入っているわけで、たいへん示唆になりました。私のもともとの考え方では、単なる手先ではなくて、そのなかには魂が入っている。それは中世の時代からずっと続いているということが、中国との比較という意味で明らかになったのではないかということをも主張したい。

つまらないと言えばそういうことになるかもしれませんが、比較という基準で、それが浮かび上がってきたのではないだろうかと思います。

足立原 きょうはありがとうございました、ではなくて、ご苦労さまでした。
(拍手)

Japanology 2005 Open Workshop: What can China learn from Japan's culture of technology?

Date: January 23, 2005

Venue: AV Studio, Toyama Citizen's Plaza, Toyama

Speakers:

GAO Zengjie (Vice-Director, Institute of Japanese Studies, Chinese Academy of Social Sciences; Visiting Professor, Hosei University)

KIYONARI Tadao (President, Hosei University)

ADACHIHARA Tōru (Representative, Japanology Research Group; Visiting Professor, Wuling University, Hunan Province)

This is a transcript of an open workshop jointly sponsored by the Japanology Research Group and the Center for International Japan-Studies of Hosei University. It took the form of a dialogue between the Chinese specialist in comparative culture, GAO Zengjie, and ADACHIHARA Tōru, who has worked for many years to promote technological advance in China. The dialogue was mediated by KIYONARI Tadao, economist and President of Hosei University.

In his comparison of the technological cultures of China and Japan, Gao suggested that the biggest turning point in the development of the two countries occurred at the time of Japan's medieval age. In contrast to China, where society was led by a class of Confucian literati concerned above all with proper governance of their country under the emperor, the 'son of heaven,' Japan's medieval age was dominated by the emergence of a military ruling class. Leaders in China, therefore, were occupied with issues that tended toward the philosophical, while leaders in Japan had to deal with more practical matters, primarily those of warfare, that led to a greater interest in technological development and the application of new technologies.

Kiyonari then pointed out that Japan's medieval age also brought with reforms in the fields of agriculture and economics, which were adopted and

systematized in the feudal system of the Edo period. Only at this time did Japan adopt Confucian ideas of governance, but at a level that had little to do with the daily life of the people, thus producing a two-tiered social structure, with agricultural workers, craftsmen and merchants inheriting the earlier concern for technology. This paved the way for Japan's quick industrialization after the Meiji Restoration, and helped it establish its reputation as an industrial power.

In response to Adachihara's query as to what China can learn from Japan's culture of technology, Gao stated that Japan's technological advances have been fostered by the Japanese concern for technical detail, the skills of Japan's workforce, and the 'spirit' that can be discerned in their concern for technical advance. While China is becoming successful at producing certain types of relatively simple products, its people still have much to learn with regard to their basic attitude toward technology and the mastering of technological advances.